

芸深先生に答う

芸深先生：  
うんしん

来信の〔蘇〕曼殊に対して深く不満を持たれていることは、わたしも同意できるところがあります。ただ青年にとって悪い影響があると心配されているのは、必ずしもそうではありません。曼殊はとても天分のある人であることは、かれの絶句と小品文を見れば、分かります。また生まれつきロマンティックな性格で、なかなか革命前後の文芸界の風気を代表するに足ります。しかし彼の思想は、不敬な話をする事になります、実にあまり聡明ではありません。要するに旧道徳の樊籠を逃れられず、——これは詩人にとっては免れ難いのでしょうか。白采君の『絶俗楼我輩語』<sup>i</sup>にしても旧時代の旧話がしょっちゅう見られます。わたしは文学に分けることのできる階級などあることを信じません。しかし文学の中の思想には確かにある階級ある時代に属するものを分けることができます。封建時代あるいは有産階級の類などはそうですし、中国の現在の道徳観念は大半が私産制度を基準にしていますから、世俗の親子男女間に対する思想も純粹にこの上に立っています。わたしは詩人は“先知”であって、十字架を持って荒野に叫ぶべきだとは信じませんが、健全な思想を持った詩人は要するにわたしを喜ばせます。郭沫若先生が何年か前に言われた「詩人は人類学に通暁すべきだ」（大意はこうです）という言葉は、今でも正しいと思っています。フランスのドーデー（A.Daudet）は両性問題についてバカなことを言ったことがあります<sup>ii</sup>、わたしはいささか不敬ながら、彼は本当に有産階級の人だと思いました、彼が実際に産があるかどうかにかかわりなく。彼の短篇はまだ愛読するに耐えますけれども。ちょうど嘘つきのコックが作る包子が美味しいものであっても構わないようなものです。曼殊の思想は平凡で、少し昔の読書人のようなところがあるかもしれません、（胡適之博士もかつて『新青年』の通信で『絳紗記』を痛罵したことがあるように、）だが彼の詩文は冷静に言えば確かにうまく書けています。あるいは一般の名士遺老に比べてずっと良く、まだ本気と風致があつて、彼の個人が表現できていると言つていいかもしれません。これは彼の長所です。先生は曼殊は鴛鴦胡蝶派<sup>iii</sup>の人間だとおっしゃいます。少し苛酷ではありますが、実は本当です。鴛鴦胡蝶派の末流は、まことに手の着けようのないほど悪くなつてしまいましたが、これも現代中国の宣統・洪憲の間の一種の文学潮流で、一半はもちろん伝統による成長ですが、一半は革命の頓挫による反動で、自然と頹廢に傾くのは、もともと怪しむに足りません。ただ旧思想があまりにも勢力を占めすぎているので、しだいにますます墮落し、『玉梨魂』といったようなものになってしまうのです。文学史がもし個人の愛読書目の提要で、ただ意にかなつた詩文を選んで評論するというのでなく、文学潮流の変遷を叙述することを主にするならば、ちょうど近世文学史が八股文を無視できないように、現代中国文学史も鴛鴦胡蝶派を拒否できず、それに正当な位置を与えざるを得ません。曼殊はこの派の中では大師の名号に値しましうが、もし儒教の中の孔仲尼のように、彼らの弟子たちに纏わり付かれるならば、たやすく彼の本色は埋没されてしまうでしょう。『語絲』で彼のことを述べたのは、適当に話したままで、あるいは少し真相を明らかにしよ

うと思ったのかもしれませんが。そういう考えは執筆人にもありました。そのほかには決して提唱あるいは推崇の意味はありません。『語絲』社は決して宣伝したりあるいは打倒しようとする固定したものは持っていません。みんなはただ大同小異の範囲内で各自が話をするだけで、各人の主張は、本人が責任を持ち、全く三つの手出しはしない<sup>iv</sup>やり方です。自ずと、決してしない話題があります。例えば獅子印や虎印などの雑誌の話題です。我々は、友人のよもやま話を聞くように、読者が読んで参考にするだけで、自分の判断を経ないでは信じることがないよう希望します。したがって『語絲』で曼殊を語ることは青年に良くない影響を与えるはずがないとわたしは思います。これがわたしと先生の意見が違ふところです。事実、現今の青年の多くが鴛鴦胡蝶化しているのは、おそらく本当でしょう。だがわたしはその原因は別にあるはずだと思います、つまり（1）に上海気質の流毒、（2）に反革命勢力の圧迫で、革命前後といささか似ています。要するに、現在はまだロマン時代で、およそロマンティックなものはなんでもあり得ます。どうしてこの鴛鴦胡蝶派だけに限りましょう。現在天に届くほど高唱されている血涙の革命文学が、どうしてロマン時代の名産でないことがありましょう。民国十六年五月三十日、豈明、北京にて。

※初出：1927年6月11日『語絲』第135期

---

<sup>i</sup> 白采『絶俗楼我輩語』 白采（1894～1926）、童昭海、字は国華。江西高安の人。『疾者の愛』1925で詩人として知られる。『絶俗楼我輩語』1927はその随筆。絶俗楼はその室号。

<sup>ii</sup> ドーデーの発言 未詳。

<sup>iii</sup> 鴛鴦胡蝶派 清末から民国初期にかけて流行した旧派小説の一派。才子佳人を主人公として駢文で書かれた通俗恋愛小説で、周作人は後出の『玉梨魂』（徐枕亜 1912）をこの派の開祖とする。文学革命派からは攻撃的になった。

<sup>iv</sup> 三不管的辦法 未詳。